

ドイツ海外研修報告（言語力・コミュニケーション力の育成）

I 研修の内容

教育課題研修指導者海外派遣プログラムで、10月28日から11月7日まで、ドイツの言語力・コミュニケーション力の育成について研修を行った。

1 研修調査団の研究課題

- (1) ドイツの教育システムと学校教育の実情
- (2) コミュニケーション力育成のための授業の実態

2 調査団の調査対象

学校関係	ベルトルトブレヒトオーバーシューレ（総合制中等教育学校）グルントシューレ（小学校）ヘルベルトフーバーゼクンダーシューレ（総合制中等教育学校）ヘルマンエーラシューレ（ギムナジウム）ハウプトシューレ（基幹学校）他
関係機関	ベルリン州教育委員会 ドイツ教員養成機関 ヘッセン州教育委員会

II 研修の成果とまとめ

1 ドイツの教育システムと実情

ドイツは2000年の「PISAショック」を受け、学制改革に乗り出した。その大きな特徴として、これまで小学校4年生まで通学していたグルントシューレ（基礎学校）を州によっては6年生とし、さらに、小学校4年生でリアルシューレ（実科学校）とギムナジウムに進学する場合もある。また、2000年当初にあったハウプトシューレ（基幹学校）は、ドイツ連邦全体としては廃止する傾向にあり、その代わりとして、従来のハウプトシューレ、リアルシューレ、ギムナジウムを統合した学校として統合型と協力型のゲザムトシューレ、さらに、オーバーシューレ（総合制中等学校）、また、ハウプトシューレとリアルシューレを統合したインテグレイトが、ギムナジウムと並立して存在するようになった。ドイツの学校教育制度改革は、移民が多くドイツ語を使用できないということが大きな問題である。特に、ベルリン市には移民が多いので言語の育成に力を入れていた。

2 コミュニケーション力育成のための授業の実態

ドイツの学校における授業は転換期にあると言える。ベルリン市で見学した小学校では、言語を意識し、ペア学習、グループ学習も取り入れ、コーポレーション（共同）に気をつけた授業が行われていた。その学校では、学ぶと言うものは個人に任せられるのだが、みんなで学ぶということも大切と考えており、どの科目もコミュニケーションに気を掛けて授業を行い、みんなで話し合いながら授業をすることに気をつけていた。しかし、他校の実際の授業を見る限り、教師が前で説明している授業も多く、改革途上にあることがうかがえた。特に、ドイツでは、移民の問題がドイツ語教育との関連で、大きな問題となっている。その移民の子どもたちが、ドイツの学校に通学してきており、そこでの言語教育としてのコミュニケーションのあり方が、大きな課題となっていると感じた。

現在、日本でも、「各教科における言語活動の充実」が図られ、学習活動をとおして「思考力・判断力・表現力」を育成することが大きな課題となっている。ドイツにおいても学校制度改革によって、実効性のあるものを模索していたが、コミュニケーション力の育成を図ることで、自ら課題を解決できる能力を育成していくことが重要であると感じた。

（塩山北小学校 内田 厚子）